

タイ語と日本語
—— 「si, na」と「よ, ね」の対照的研究 ——

高橋 清子

大阪大学文学部日本学科言語系日本語教育学

卒業論文

平成三年（1991年）1月9日

<要旨>

本稿ではタイ語の文末小辞「si, na」と日本語の終助詞「よ, ね」を対照することによって、両語話者の談話における情意・発想の異同を探る。先ず共起形の「sina」と「よね」を対照し、「si」の優位性と「ね」の優位性を明らかにして両形式の性格付けを行う。「si, na」は話し手の発話内容に対する正しいあるいは望ましいといった確信を表し、「よ, ね」は話し手と聞き手が談話の場を共有しお互いが談話に携わって談話世界の構築に貢献しているという共存意識を表す。特に「ね」は専ら対人意識を表し、絶対的に聞き手を考慮する。本稿で用いる確信という概念を日本語のモダリティの階層的な構造の枠組みの中に位置付けるとすれば、命題内容の確定・非確定といった判断の成立の外側、かつ、聞き手に対する呼び掛けの内側となろう。確信とは、判定を表明する時点で、その判断を成立させた動機や意向といったものの正当性や確かさを自ら認定することだと考える。本稿では、判断を成立させた動機や意向等を含めて発話内容とする。そして、聞き手に阿ることのない絶対的確信を表す「si」、聞き手に対する懇ろな気持ちを含み得る柔らかい確信を表す「na」、聞き手の判定を察して仮定する擬似的確信を表し得る「よ」と各々性格を異にする。次に様々なムードにおける具体的なふるまいを検討する。働きかけのムードでは、確信を表すか否か、その形式自体に聞き手への直接的な懇ろさを含み得るか否かによるそれぞれの性格の異同を考え、「si, na」の副次的親密性や「よ, ね」の第一義的親密性にも触れる。問いかけのムードでは「na」と「ね」を対照し、聞き手考慮についても言及する。述べたてのムードでは修辞疑問、独話、応答、感嘆の各項目を取上げ、両語話者の情意・発想についての考察を進める。タイ語話者ははじめある率直さに重きを置いて発話内容の明確化を優先させ、日本語話者はお互い共感を期待し合ってむしろ対人協調を優先させる。

<目次>

	ページ
1 はじめに	1
2 タイ語の文末小辞について	1
3 タイ語の文末小辞と日本語の終助詞の先行研究と、その相関の考察	3
3-1 タイ語の文末小辞の先行研究	3
3-2 日本語の終助詞の先行研究	5
3-3 タイ語の文末小辞と日本語の終助詞の相関	9
4 「sina」と「よね」の考察	10
4-1 「sina」について	10
4-2 「よね」について	12
5 「si, na」と「よ, ね」のふるまいの考察	13
5-1 働きかけにおけるふるまい	13
5-2 問いかけにおけるふるまい	15
5-3 述べたてにおけるふるまい	18
5-3-1 修辞疑問	18
5-3-2 独話	20
5-3-3 応答	21
5-3-4 感嘆	24
6 まとめ	24
7 おわりに	26

参考文献
用例の出典

1 はじめに

話し言葉においては、まとめ描くことと共に、それを直接に相手に伝えることも大切である。そのような伝達の効果に関係する要素がどの言語にも存在すると思われる。日本語においては、談話に終助詞（佐治1957）がよく用いられ、タイ語にも日本語の終助詞に似た文末小辞が存在する。タイ語と日本語を対照した文法書等を見ると、そのほとんどがタイ語の文末小辞の「si, na」と日本語の終助詞の「よ、ね」を基本的なものとして取上げているが命令を表す助（動）詞として扱った「si」は別にしても、「si, na」と「よ、ね」があたかも同等の立場で対応するかのような置換えの文を例示し、安易に解説しているものが多い。しかし、それぞれの実際の用例を収集してみると、その対応関係はそんなに簡単なものではないことに気付いた。そして「si, na」「よ、ね」各々のふるまいは、タイ語話者と日本語話者との談話における情意・発想の異同を反映しているのではないかと考えるようになった。以上の着眼点から、本稿では、タイ語の文末小辞である「si, na」と日本語の終助詞である「よ、ね」の対照を試み、談話における両語の表現形式の異同を検討すると共に、そこからうかがえる両語話者の情意・発想の違いを探ってゆく。（ただし、位相差は無視し、年配の男性に使用される「な」等は対象外とする。また、独話に表れる「ねえ」は「なあ」のバリエーションとして「ね」と区別する。イントネーションについても、本稿では特に触れない。）

2 タイ語の文末小辞について

タイ語の文末小辞には、話し手の性別、あるいは話し手と聞き手との上下関係や親疎関係、さらに疑問形か陳述形か、といった区別によって、非常に細かい型に分類され使用されている文末小辞のクラスがある。ここでは仮にこのクラスの文末小辞を待遇小辞と呼ぼう。タイ語の談話においては、この待遇小辞のどの型を使用するか、あるいは全く使用しないかによって対者態度が明確化される。従って、待遇小辞は対者態度を表し、その他のクラスの文末小辞は話し手の発話内容の認め方や把握の在り方を表すと概ね言える。しかし、後にも述べるように、待遇小辞と目される「wa」は独話に現れ得るので対者態度のみを表す純粋な待遇小辞とはいえず、話し手の把握の在り方

を表す機能も持っているようだ。かつ一方で、待遇小辞ではないと目される「na」は待遇小辞的な側面も持っているようである。「wa」や「na」はそれらの連続相を成立させている存在であろう。

また、否定要素や疑問要素や指示詞や、実名詞要素(substantive)か述詞要素(predicative)か、等といった特定の要素と関連を持つ文末小辞もタイ語には豊富に存在する。しかし、本稿の考察対象である「si, na」は、文中の特定の統語的要素とは関連を持たない文全体に関わる文末小辞である。

因みに、「よ, ね」には文末ばかりではなく文中にも現れる間投用法があるが、「si, na」にもそれらしき用法がある。しかし、「よ, ね」と同じように聞き手に対して直接的に働きかける機能を持つのかどうか疑わしく、その性格付けに関しては、まだはっきりした結論を得ていない。従って、本稿では敢えて間投用法には触れず、文末における用法に限って考察することを断っておく。

考察に入る前に先ず、タイ語を御存知ない方のために、タイ語の文末小辞が実際どのように談話で使用されるかをJ. Marvin Brown 1964から引用して例示するので参考にして頂きたい。(訳は高橋)

A1 khun cà pai yaŋgai. あなた、どうやって行くつもり?
あなた(未来)行く どの方法に

B1 cà dæŋ pai. 歩いて行く。
歩く

A2 cà dæŋ pai rǔw. 歩いて行くだって?

B2 dæŋ pai nâ si. bòk léεo ŋai lâ. 歩いて行くよ。言っただろ。
言う (完了)

A3 mâi tǔŋ dæŋ pai ròk. 歩くことはないよ。
~する必要はない

B3 thammai mâi tǔŋ dæŋ pai lâ. なぜ歩かなくてもいいのさ。
なぜ

A4 pai thêksîi kô dâi. タクシーでも行ける。
タクシー ~でもよい

B4 kô phǒm cà dæŋ pai nîi. だって僕、歩いていきたいんだ。
私

(B2の「nâ」はR. B. Noss 1964に従って①クラスの文末小辞とし、本稿で取上げる「na」とは区別する。3-1 タイ語の文末小辞の先行研究を参照。)

3 タイ語の文末小辞と日本語の終助詞の先行研究と、その相関の考察

3-1 タイ語の文末小辞の先行研究

○Richard B. Noss 1964 『Thai Reference Grammar』

khun mâi pai kâp kâo rôk rǔw khráp nîi.
 あなた(肯定)行く べし 彼ら ① ② ③ ④

Well, (you mean) you are not going with them!?

①クラス

節中の特別な統語的要素と密接な繋がりがある。1)~5)は実名詞要素(substantive)と強い繋がりを持ち、6)~8)は述詞要素(predicative)と強い繋がりを持つ。各々、相補分布の関係にある。強調形が無い。

- 1) rǔk, rôk, dǔk, drǔk 否定の勢力を実名詞要素に向ける。 not that
 2) nâ 肯定陳述の中で1)の代わりをする。 that's what
 3) nîi, nî 聞き手が知らないだろうとき。 this is what
 4) gai /nai/(what), /gai/(why)の返答に。

something known previously becomes newly relevant

- 5) nê, nîa something previously unknown is now relevant

- 6) lá, lâ, la changed situation

- 7) mâi yes-no question

- 8) thê, thêət 穏やかな示唆。 why don't you, let's

②クラス

4)lêと5)laを除いて、特別な統語的要素とではなく、文全体と関連がある真の文末小辞。各々、相補分布の関係にある。強調形がある。

- 1) rǔw, rǔə 他動詞述語の過去の疑問、否定疑問では必須。
 is the assumption correct?

- 2) sii, sí, sì, si 行動に駆りたてる。
 this is the correct behavior or belief

- 3) naa, nâ 希望や命令に対する容認を促す。 I think
 nâ 弱い疑問や確認要求。 is' nt it so

- 4) lè, là, è 指示詞と強い関連がある。

here's the thing we're been looking for

- 5) lâ, lâo 基本的に疑問要素と強い関連がある。
 lâ how about that

6) maŋ, kramaŋ
mãŋ

parhaps

③クラス

節構成要素に関連がない。1)~4)は話し手の性別も表し、1), 2)は敬意を表し、3), 4)は親密でないことを表し、5), 6)は横柄さを表す。親友や対等者の間ではしばしば全く使用されない。この他にも、極めて特殊化した、王族に対するもの等がある。各々、相補分布の関係にある。

陳述形 / 疑問形

- | | | |
|-----------------|------------------|-----------------------------|
| 1) khráp̄hǒm | / khráp̄hǒm | 男性が上位者や尊敬する人、高貴な人に。 |
| 2) cáokhâ | / cáokhâ | 女性が上位者や尊敬する人、高貴な人に。 |
| 3) khráp, há | / khráp, hã | 男性が上位者や目上、親しくない対等者に。 |
| 4) khâ, hâ | / khã, hã | 女性が上位者や目上、親しくない対等者に。 |
| 5) câ, yâ | / câ, yã | 下位者や目下に。しばしば対等者間で。 |
| 6) wâ, wá, wóoi | / wã, wóoi, wéai | 乱暴に、あるいは対等者に。形の分布は、はっきりしない。 |

④クラス

呼格(vocative)/nii/ に似て、聞き手の意識を喚起する効果がある。相補分布の関係にある。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1) nîi, nî, nîa | here, now, you |
| 2) nân, nâ | there, now, you |

ここに挙げられている他にも多くのバリエーションがあるが、本稿では特に触れない。R. B. Noss 1964が承接関係によって四つに分類する中の②クラス、2)「si」、3)「na」が本稿の考察対象である。タイ語の文末小辞の分類は基本的にR. B. Noss 1964に従い、本稿でも①クラスから④クラスまでの名称を用いることにする。①クラスは言わばとりたて詞的なものを含み、④クラスは言わば間投詞的なものを含んでいるようだ。②クラスも含めてこれら①、②、④クラスが独話可能であるのに対して、③クラスは、6)「wa」を除けば独話では現れないことから、対者態度のみを表す真の待遇小辞といってよいだろう。(以下「wa」は③クラスの例外とし、その異同は問わない。)

R. B. Noss 1964は、②クラスの意味を「聞き手の反応への期待」だとする。しかし、②クラスの文末小辞は独話でも使用されることから、聞き手目当て(佐治1957)のみの機能を持つ訳ではないことが分る。むしろ判断目当て(佐治1957)の機能が基本であって、発話時における話し手の情意によって聞き手にもちかけ得るのだと考えたい。「si」「na」の属する②クラスは、

指示詞と強い関連を持つ4)leと疑問要素と強い関連を持つ5)laも含んで、発話時の認定意識を表すのではないか。ただし、「na」については注目すべき点がある。R. B. Noss1964は、同じクラスの中ではお互いが相補分布の関係にあるとしている。しかし「na」は「sina」のように「si」と共起し得るのである。また、「naca」「nakha」「nakhrap」等の待遇小辞と結合した形があり、「nakha」という名の女性雑誌があるほどその語感は一語的である。「na」の待遇小辞的側面については、後の考察で述べたい。

3-2 日本語の終助詞の先行研究

○佐治圭三1957「終助詞の機能」『国語国文26』

終助詞	第一類（聞き手目当て）	{ ね, な よ, や, え, い さ }	同意を求める。
			話しかけ問いかける気持ち。
	第二類（判断目当て）		
			確かだという態度（聞き手に対する働きかけを含む。）
		{	わ 聞き手を押しつける。
		{	とも 聞き手を受け入れる。
		{	ぞ, ぜ 聞き手に押しつける。
			不確かだという態度（聞き手に対する働きかけを含まない。）
			か 一般に不確か。

○宮地裕1958「ことばの使い方 助詞・助動詞」『日本文法講座5』

{
行け
起きろ
}

雨	φ	(デス)		さ		な
行く	φ	(マス)	か	よ		ね
雨	ダ		わ	い		
行く	φ		ぞ ぜ			φ
			純終助詞		間投性終助詞	
終助詞						

甲種：体言に下接しうる。	か	さ		
乙種：用言にしか下接しない。	わ ぞ(ぜ) な(禁止)	よ(い)	ね(な)	
種	類	第一類	第二類	第三類

- ↑か 非間投助詞
 さ 半間投助詞 第一類 判定とのつながりを持つ。
 よ 準間投助詞 第二類 対象への訴えを存する。
 ↓ね 純間投助詞 第三類 話し相手への呼びかけをしか存しない。

佐治1957は、最も終助詞らしい終助詞として「<ね、な>、<よ、や、え、い>、さ、とも、<ぞ、ぜ>、わ、か」を取り出し、それを、続く文節に付き得て他の終助詞の下に付き得るか否かによって第一類と第二類とに分ける。第一類は聞き手目当ての終助詞であり、第二類は判断目当ての終助詞である。「よ、ね」は聞き手目当ての終助詞であるところの第一類に分類される。「ね」は問いかけ同意を求めるような気持ちを表し、「よ」は「ね」とは逆に押しつけるような気持ちを表すという。

宮地1958は、終助詞に、終止性の純終助詞と、間投助詞としても働き得る機能を持つ間投性終助詞とを認める。純終助詞は判断の様相を表すに近く、間投性終助詞は間投助詞と同類である。「よ、ね」は間投性終助詞に分類される。

渡辺1971は、終助詞を、判定とのつながりを存する第一類と対象への訴えを存する第二類と話し相手への呼掛けをしか存しない第三類とに分ける。間投助詞化という基準から、「か」を非間投助詞、「さ」を半間投助詞、「よ」を準間投助詞、「ね」を純間投助詞とする。従って、「よ」は対象への訴えを存する第二類に分類される準間投助詞であり、「ね」は話し相手への呼掛けをしか存しない第三類に分類される純間投助詞である。

上野1972は、Performative Sentence を仮定した上で終助詞の分析を行いその意味内容から、話し手の判断を聞き手に主張するものと話し手の判断を示し聞き手に最終的判断を委ねるものとに分ける。「よ」は前者に分類され「ね」は後者に分類される。

水谷1985は、「ね」は話し手が聞き手に同感したときや聞き手の同意を期待したりあるいは確認しようとしたときに用い、「よ」は聞き手の同意に関係なく話し手の判断を強調するのに用いるとする。そして、「ね」は共感の表現として頻繁に用いられるが、話し手と聞き手が同じ知識を共有している場合にしか使えないとする。

蓮沼1988は、発話時において自分が述べようとしていることと他の何らかのよりどころとなるものとの間に食い違いがないということ、話し手が話の場に持ち出し確認するのが、「ね」の基本的用法だとする。自己の内部感覚、記憶、知識などを吟味しつつ、今述べていることが確かにそうだとすることを確認する過程が含まれているという。「A：こんなことも分らないの？、B：分らないね。」という例を挙げ、そのようなときに話し手の強い拒絶の意が「ね」によって強化される理由は、心内を吟味し確認する過程を実際には経ない発言に、そのような行為の存在を明示する「ね」が用いられてちょうど反語表現のようになるからだという。

神尾1989は、話し手または聞き手のなわ張りとは文形の関係に着目したなわ張りの理論の中で、「ね」は話し手の内的世界にある情報が聞き手の内的世界にある情報と同一であることを示す義務的標識であるとする。ある情報をなわ張り内に持つならば、必ずその情報は内的世界内にあるといえる。従って、聞き手のなわ張り内に属する情報では「ね」の付加は義務的必須的であり、聞き手のなわ張り外の情報では「ね」の付加は任意である。任意の場合、あたかも同一の情報を持っているかのような表現をとることによって、聞き手との連帯感を示して、発話に柔らかな感じを与えるという。

森山1989aは、聞き手に情報があることを前提とするか否かによる伝達機能的な聞き手情報配慮非配慮の理論の中で、平叙文における「ね」を、当該発話に関する情報が聞き手に存在すべきものと話し手が仮定する聞き手情報配慮の表示であるとする。話し手が一方的に持っている情報を述べるときに「ね」が敢えて出現する場合は、聞き手に理解・共感が可能だと仮定しての発話であって、言わば聞き手における情報の処理を配慮していることになり聞き手情報配慮に繋がるものであるという。そのときの「ね」の意味は、押付けがましいか、聞き手の同意を期待するようなニュアンスを持つ派生的なものであるとする。「ね」の基本的な意味は平叙文における聞き手情報配慮であり、さらに、同じ聞き手情報配慮としての「だろう」と比べると、「ね」の方が聞き手情報に同意的であり、また、話し手と聞き手が初めから必ずしも同一意見であると見込まれない場合の「だろう」に対して、「ね」は初めから同一意見であると見込まれた場合であるとする。

以上の先行研究を踏まえた上で、本稿の見解を明らかにしておきたい。本稿では、正しいあるいは望ましいといった発話内容に対する確信を含んでもちかけ得るかどうかによって「よ」と「ね」を分ける。また、独話に表れ得るか否かによっても「よ」と「ね」は分けられると考える。「ね」は確信を含んでもちかけることもなく独話に使用されることもないので、表される事柄と関わる判定的機能は持たず、専ら使用の当事者である人間と関わる対人的機能しか持たないと言ってよいだろう。

タイ語と対照する視点に立つ本稿では、発話内容に対する話し手の把握の在り方であるところの確信という概念を重要視する。「si, na」の属するタイ語の②クラスの文末小辞は発話時の認定意識を表すと言ってもよく、その中で「si, na」は正しいあるいは望ましいといった話し手の確信を表す形式だからである。そこで、この確信という概念をどのようなモダリティ形式として位置付けるかということが問題になろう。現段階では、はっきりした位置付けには至っていない。ただ、「si, na」の確信を添えるという働きを、日本語のモダリティの階層的な構造の枠組みの中で考えるとき、それは「か」等が担っている確定・非確定といった判断の成立の外側にあり、なおかつ「ね」等が担っている働き掛けの内側にあるものかもしれないと、漠然とした予想をするに止まっている。確信とは、判定を表明する時点で、その判断を成立させた動機や意向といったものの正当性や確かさを自ら認定することと言ってもよいかもしれない。本稿ではそのような話し手の動機や意向も含めて発話内容という言葉を用いることにする。しかし、説得力のある理論を構築するためには、当然少なくとも「si, na」以外のその他の文末小辞を検討し、できれば他の形式にも目配りをしてタイ語のモダリティ形式の全体像を把握しなければならないだろう。残念ながら今は力及ばずの状態である。

従来の日本語のモダリティ研究に即して考えると、「よ、ね」は言わば“聞き手目当て（佐治1957）”で“話し相手への呼びかけ（渡辺1971）”を主にする“発話・伝達のモダリティ（仁田1989）”に属し、一方「si, na」は言わば“判断目当て（佐治1957）”で“判定とのつながり（渡辺1971）”が濃い“言表事態めあての判断のモダリティ（仁田1989）”に属すると概ね言える。そして、いずれも“言表態度的意味（仁田1989）”を担っている。つまり、言表事態（発話内容のうち対象的・客体的な出来事や事柄）に対する話し手の把握の在り方や話し手の発話・伝達の態度の在り方を表したものである。しかし、「よ」も「si, na」のように発話内容に対する正しいあるいは望ましいといった話し手の確信を含み得るし、「na」も「よ、ね」のように、談話の場を共有する共存者としての聞き手を懇ろに気遣い得ると考え

る。「よ」と「na」の存在は両範疇の連続相を成立させているのではないだろうか。

「ね」については、森山1989a, 1989b が聞き手の情報の持ち方に関する話し手の認識という観点からのアプローチを試みている。しかし本稿では、そうした情報伝達機能的文法の立場から「よ、ね」を論じることは避け、あくまでも懇ろさや阿りといった話し手の情意を主眼に考えてゆく。なぜなら、タイ語の「si, na」を念頭に置いて日本語の「よ、ね」を考えると、それらの談話における使用制約は話し手や聞き手の情報の持ち方から来るというよりも、やはり話し手の聞き手に対する情意から来ていると説明した方が適当ではないかと思えるからだ。「よ、ね」はその形式自体に話し手の聞き手に対する情意を含んでいる。そして、「si」と「na」の分水嶺はまさにその情意を形式自体に含み得るか否かにあると言ってよいのではないかと考えられるのである。例えば、「よ」と「ね」が働きかけのモードに使用されてその調子を和らげたり、「na」が願望のモードに使用されたり、「na」と「ね」が問いかけのモードに使用されたりし得るのは、それらの形式自体に話し手の聞き手に対する懇ろな気持ちや阿りの気持ちが含まれているためであると考えられる。まず話し手の聞き手に対する情意があつて、そこから聞き手の情報を配慮するか否かも導き出されて来ると考えたい。同じ知識を共有しているか否か、情報のなわ張りをしん酌するか否か、といった聞き手考慮のそもそもの根源は話し手の発話時の情意・発想であり、それは日本語なら日本語、タイ語ならタイ語のそれぞれの談話において言わば癖があるものだと思われる。その癖を本稿では探つてゆきたい。

3-3 タイ語の文末小辞と日本語の終助詞の相関

タイ語の文末小辞全般と日本語の終助詞全般を比較対照することを本稿の目的としているわけではないので、詳しい相関関係を探ることは敢えてしないが、概略的ではあつても私見を述べて本稿の背景を明らかにしておこう。

タイ語の文末小辞の①クラス、④クラスに相当する日本語の終助詞は存在せず、「si」「na」の属する②クラスは「わ」「ぞ」「ぜ」「か」等に対応するのかもしれない。しかし、後者の「か」以外の確信を有するものは③クラスの待遇性を含みこんでいるようだ。「ね」「よ」「さ」といったいわゆる間投性終助詞（宮地1958）は相手に対する呼び掛けという機能では③、④クラスに通ずるところもあるようにも思われるが、「よ」「さ」は確信を含み得るという点で②クラスに対応するのかもしれない。「ね」のように専ら話

し手と聞き手の共存意識を表す形式は、タイ語の文末小辞には無いと言っていいだろう。独話も可能である表出的な機能を持つという点で、④クラスは「な(あ)」「ねえ」に対応する部分があるようだ。

かなり大まかではあるが、表される事柄と関わる判定的機能と、使用の当事者である人間と関わる対人的機能の含み方の関係を〔図1〕に示す。

〔図1〕判定的機能と対人的機能の含み方

	対人的機能				
	判定的機能				
タイ語の文末小辞	①クラス	②クラス (si)	na	③クラス	④クラス
日本語の終助詞	その他		よ	ね	な(あ) ねえ

4 「sina」と「よね」の考察

それぞれの共起形である「sina」と「よね」の対照を通して、それぞれの性格を考える。

4-1 「sina」について

「sina」は発話内容に対する話し手の正しいあるいは望ましいといった確信の表明であり、従って独話にも表れ得る。しかし、「na」の含む懇ろな気持ちを持って聞き手にもちかけることも可能である。

(1) phrún ní cháao khon mái mii aahǎan léeo si ná.
 明日の朝 きっと ない 食事 (完3)

明日の朝は、きつともう食事は出ないな。

- (2) phrũng nĩ lɛɛo si ná khráp, wan sãmkan.
明日 (完3) 日 重要な

明日ですね、大切な日は。

待遇小辞「khrap」を使用した(2)は当然聞き手目当てであるが、(1)は文脈や場面によって、独話、聞き手目当てのどちらでもあり得る。とにかくいずれも話し手の確信を表している。

- (3) khog phoo cai si, òok pheɛŋ.
きっと 満足である かなり 高価な 満足だろう、高価だから。
- (4) khog phoo cai si khá, òok pheɛŋ.
 御満足でしょう、高価ですから。
- (5) khog phoo cai si ná khá, òok pheɛŋ.
 御満足でしょう、高価ですからね。
- (6) khog phoo cai si ná, òok pheɛŋ.
 満足でしょう、高価だからね。

「na」と待遇小辞が結合した「naca」「nakha」「nakhrap」等が「si」と共起して「sinaca」「sinakha」「sinakhrap」等となるとき、それら「na」と待遇小辞が結合したものは、一つの単位として、待遇小辞の機能を担っているように思われる。聞き手目当てに発話された(3)(4)(5)は、「khog phoo cai si (きっと満足だろう)」という発話内容に対する認め方は同じで、聞き手に対する待遇性が異っているといつてよいだろう。それは聞き手目当てに発話された(6)の「na」の性格を考える上で参考になろう。(6)も「khog phoo cai si (きっと満足だろう)」という認め方は(3)(4)(5)と同じであり、その異同は聞き手や場面等によって使い分けるといった待遇的なものではないだろうか。聞き手目当てに発話された「sina」の「na」は、待遇小辞的色合いが濃いように思う。しかし(1)のように「sina」は必ずしも聞き手目当てで発話されるという訳ではなく、独話であってもその発話は極自然であり、「よ」が独話で発話される時のような話し手自身にもちかけている特殊な場面といった感じは全くない。(5-3-3 独話を参照。)それらを考え合せると、やはり「na」の基本的用法は確信の表明であり、しかし積極的な親密性を表す待遇小辞的な用法も可能であると考えるのが妥当であろうと思われる。そして、その連続性を可能にしているのは懇ろな対人意識をその形式自体に含み得る「na」の確信の柔らかさであると言えるだろう。

4-2 「よね」について

「よね」は、話し手と聞き手が談話の場を共有しお互いが談話に携わって談話世界の構築に貢献しているという共存意識を含むので、独話に表れることはない。懇ろな気持ちで共存者としての聞き手を気遣いながら話し手の確信を表したり、阿りの気持ちで聞き手を判定主と見立てて共感を期待しながら聞き手の確信を確認したりする。(7)(8)(9)(10)は前者の例であり、(11)(12)(13)は後者の例である。ただし多くの場合、(14)(15)のように文脈によって確信の主体は話し手でも聞き手でもあり得る。

- (7) これから二週間で真剣勝負。この間をうまく乗り越えれば裕弥ちゃんはお父さんの胸に抱っこされて帰れるんですよ。(手術直後の医師の談話)
- (8) 先生、コーヒーお嫌いでしたよね。
- (9) 行けよね。／行ってよね。／行ってくださいよね。
- (10) 行ってくれるよね。
- (11) そりゃあ、君だって怖いよね。
- (12) 行くよね。／行きますよね。
- (13) 行ってあげるよね。
- (14) カッコ悪いよね。
- (15) そうなんだよね。

以上、「si, na」と「よ, ね」の共起形である「sina」と「よね」の両者を対照することによって、個々では気付きにくいそれぞれの性格による優位性を明らかにすることができた。「sina」では「si」の表す確信の方が優位に立ち、「よね」では「ね」の表す対人意識の方が優位に立つといえる。つまり、タイ語で「si」を用いる限りは、たとえ聞き手に対する懇ろな気持ちを含んでもちかけ得る「na」を添えようとも、必ず話し手の発話内容に対する正しいあるいは望ましいといった確信を表明するのであり、日本語の「ね」と共起した「よ」のように、話し手の確信というよりも話し手が察した聞き手の確信、つまり、聞き手はこう正しいあるいは望ましいと思っているだろうと仮定した確信を表すことはできない。ここでは仮に、「ね」と共起したとき「よ」が表し得るそのような確信を擬似的確信と呼ぼう。日本語の「よね」では、談話における共存者としての聞き手を絶対的に考慮する「ね」が必ず優位に立つため、「よ」の擬似的確信という現象も起り得るのではな

いかと思われる。談話の場を共有する話し手と聞き手が共に談話世界の構築に積極的に貢献しているという含意を持つ「よ、ね」は、その共存意識によって話し手の判定の主体性を曖昧化し、言うなれば話し手と聞き手の両者を一体化する機能的役割を果たしていると考えられることも可能であるかもしれない。

5 「si, na」と「よ、ね」のふるまいの考察

働きかけ、問いかけ、述べたての各ムードにおける「si」「na」「よ」「ね」の具体的な現れ方をみてゆく。述べたてのムードでは、タイ語話者と日本語話者との談話における情意・発想の異同が、特に明らかになるような項目を取上げる。

5-1 働きかけにおけるふるまい

「si, na」は、発話内容に対する話し手の正しいあるいは望ましいという確信を聞き手にもちかけることによって、しばしば命令を表す。多くのタイ語の解説書、文法書等で、「si」は命令助(動)詞として扱われているほどである。

(16) maa nîi nòoi si. ちょっと、ここへ来い! (訳は富田1978)

(17) maa nîi nòoi ná. ちょっと、ここへ来なよ。(")
来る ここ 来よ

(18) kin si. 食べよ。(")

(19) kin ná. 食べろよな。(")
食べる

富田1978によると、(16)(17)では(16)の方が、(18)(19)では(19)の方が、きつい表現であるという。なぜだろうか。これには聞き手に対する懇ろな気持ちとその形式自体に含み得るか否かという、「si」の確信と「na」の確信の異同が関係していると思われる。

一般に「maa nîi (ここへ来る)」ことは話し手の利益になる行動であり「kin (食べる)」ことは聞き手の利益になる行動であるといえる。だから聞き手を話し手の利益になる行動に駆立てるときは、聞き手を考慮しない自

分本位の確信「si」によってその調子は強まるが、聞き手の利益になる行動に駆立てるときは、懇ろな気持ちを含んで聞き手へ期待する柔らかい確信「na」でもちかけたほうが、無色の確信でもちかけるよりも働きかけの度合いが強まるといえるのではないだろうか。

ここでは「si, na」の親密性についても触れておきたい。「si」によって話し手の利益になる行動に駆立てている(16)は親密さを含むが、聞き手の利益になる行動に駆立てている(18)は親密さを含まないという。「na」を使用した(17)(19)も必然的に親密さを伴うという訳ではない。「よ、ね」が積極的な親密表現の手段となるのに対して、「si, na」の親密性は副次的なものであるといえよう。

(20) chəən taam sabaai ná.

どうぞ、お楽に。

(21)? chəən taam sabaai si.
どうぞ 気楽にする

(22) khǎo hâi chōok dii ná.

ご幸運を。

(23)? khǎo hâi chōok dii si.
願わば〜であれ 幸運

懇ろな対人意識を含み得る「na」の確信の柔らかさに関しては、(20)の表現が自然であるにもかかわらず、(21)の表現が極めて不自然であることから説明できる。(21)を取えて発話するとすれば、「どうぞ、ご勝手に。」といった皮肉っぽいものの言い方となる。これは(22)(23)のような願望のムードにおける「si」の不自然さと関連があろう。つまり、「si」は聞き手に阿ることのないあくまでも話し手本位の確信を表し、「na」のように談話の場における共存者としての聞き手を考慮して懇ろな気持ちを添えることができないようだ。

また、Mary R. Haas 1964 によると、(19)は「Can I eat it?, I 'll one Okey?」と「Wo' nt you eat it?, Why don ' t you take it?」の二つの解釈が可能であるという。これも「na」の柔らかい確信によるものであるといえる。前者は話し手の希望を含んだ確信でもちかけ、後者は聞き手への期待を含んだ確信でもちかけているのだと説明できる。このように、聞き手に対する懇ろな気持ちを含み得るところが、「si」の確信にはない「na」の確信の柔らかさなのである。

「よ、ね」は、談話の場を共有しお互いが談話に携わって談話世界の構築に貢献しているという話し手と聞き手の共存意識を含意することによって、両者の心的距離を縮める働きを持つ。そうした意味で「よ、ね」は日本語に

(30) túu thoorasàp sǎatharàná mii mái ná.

公衆電話ボックス ある ~か

公衆電話はあるかな。(独話) / 公衆電話はある？(問いかけ)

「si」は問いかけには使用されにくい。発話内容に対する正しいあるいは望ましいといった話し手の確信を含んでいて、聞き手を判定主とすべく聞き手にもちかける問いかけのモードにそぐわないからだと思われる。だが、同じく確信を含む「na」は、その確信の柔らかさによって聞き手の応答を期待する気持ちを持ってもちかけることが可能であり、(28)(29)のように確認要求を表し得る。疑問語と共起して(30)のように問いかけることもできる。しかし、疑問語と共起する場合は修辭疑問であることも多い。(5-3-1 修辭疑問を参照。)

(31) コーヒーとアイスクリームですね。(確認要求)

(32) いい天気だね。(同意要求)

(33) 君は何をしたいんだね。

(34) 次の発表者は誰だよ。

(35) 何だい？ / もう、いいかい？

「ね」は、(31)のように阿りの気持ちを持って聞き手を判定主と見立て共感を期待しながらもちかけるという確認要求を表し得る。(32)のように聞き手と同一視点に立った同意要求も表し得る。(33)のように疑問語と共起して問いかけることもできるが、それはしばしば皮肉めいた反語になり易い。「よ」も(34)のように疑問語を含む先行文であれば承接するが、「よ」が付加されると、聞き手を判定主とすべくもちかけているというよりも、「次の発表者は誰だ」という命題内容を発話する正当性を認定しながら(確信を添えながら)聞き手の反応を期待してもちかけているとした方が適當ではないだろうか。「よ」が付加されると反語であることが多い。(5-3-1 修辭疑問を参照。)「い」となって(35)のように問いかけることもある。

「na」と「ね」を問いかけのモードの中で対照してみると、両者の性格の違いが感じられる。「na」を添えた問いかけでは話し手の判定を聞き手に確認させる傾向が強いようだ。例えば(36)は聞き返すときによく用いられる表現であるが、このとき添えられる「na」には、(37)(38)(39)(40)のような述べたてや働きかけのモードで「na」が担っている確信表明の機能との連続相が認められるように思われる。

- (36) (phúut) arai ná. え? 何て言ったの?
話す 何
- (37) aaháan yen, cà kin thîi hôg ná. 夕食は部屋で食べるよ。
夕食 (意志) 食べる ~で 部屋
- (38) kεε pen fàai chon chán ná.
きさま ~である 側 衝突する 私
お前の方がおれにぶつかって来たんだ。
- (39) maa sǎai mài dái ná. 遅刻してはいけないよ。
遅刻する ~てきない
- (40) reo reo khào ná. 早くして。
早い, 速い (到達)

(36)では話し手が「今あなたの言ったことが何か分らない、何を言ったのか」という命題内容を発話する正当性を認定しながら(確信を添えながら)同時に応答を期待する気持ちでもちかけることで聞き手に確認を要求しているのではないだろうか。そうした「na」の問いかけと比べると、「ね」の問いかけは(31)のような確認要求も表し得るものの、「ね」の含む聞き手との共存意識のため、どちらかと言えば話し手と聞き手が同一視点に立った同意要求の色合いが濃いように思われる。「na」の問いかけは確信を強調して聞き手に確認させる傾向が比較的あり、「ね」の問いかけは共存意識を強調して聞き手に同意してもらう傾向が比較的あるように感じる。

日本語の談話は、やりとりのテンポの速さやあいづちの多さ等にみられるように、話し手と聞き手の相互補完的成立の傾向が顕著である。談話の場の共有意識、つまり、お互いが談話に携わり談話世界の構築に貢献しているという含意を積極的に添える傾向が強い。そうした含意の習慣化された標識として「よ」「ね」といった談話的小辞があるといつてよいかもしれない。話し手と聞き手の両者が相互に調整して成立させてゆく共話の世界の構築強化の役割を「よ」「ね」は担っているのだろう。そうした特徴を持つ日本語の談話においては、必然的に話し手は聞き手に近い事柄かどうかを常に考慮することになる。聞き手に近い事柄については、例えば(41)のように「ね」を付加し故意に聞き手を判定主と見立てて確認する形をとって言及したり(42)のように「だろう、でしょう」を付加し故意に聞き手を考慮した推測の形をとって話し手の確信を押し出して言及したりする。

(41) あなたのお隣さん、タイ出身の方だそうですね。

(42) 御両親もきっとお喜びでしょう。

聞き手に近い事柄について言及するとき、日本語では何らかの聞き手考慮の形式が必要であるのに対し、タイ語では特に必要ではないので、タイ語話者が日本語を話すときその点での注意が必要だろう。しかし、タイ語にも聞き手を考慮しなければならない制約形式が無くはない。その制約の条件が日本語と異なっているのである。例えば話し手が自分の感情を述べる時、聞き手の感情が前提としてある場合、タイ語でも聞き手考慮の形式が必要である。(5-3-1 修辞疑問を参照。) 5-1 働きかけにおけるふるまいで言及した願望のムードでの「si」の使用制約もこれに準ずるものであろう。常に聞き手の立場や感情を考慮し、相手の意向に添うことを最優先にしがちな日本語話者とは違って、タイ語話者の聞き手考慮の在り方とは、先ず自分の感情や意向があり、そこから聞き手考慮に繋がってゆく形であると言ってよいのではなからうか。

5-3 述べたてにおけるふるまい

述べたてのムードでは修辞疑問、独話、応答、感嘆の四項目を取上げる。これまでに明らかになった「si」「na」「よ」「ね」それぞれの性格の裏付けをしてゆくと共に、タイ語話者と日本語話者の談話における情意・発想の異同についてもさらに考察を深める。

5-3-1 修辞疑問

(43) pen nák sùwup bèep nǎi kan nâ. 何がスパイだ。(反語)
～である スパイ どんほ いっけい

(44) mǎarai cà kèng phaasǎa thai sák thii nâ.
いっ (未来) 上手い タイ語 (ほんの～ (類別詞) ～回)

早くタイ語がうまくなならないかなあ。(願望)

(45) そんなことするかよ。(反語) / どこがいいんだよ。(反語)

「na」が疑問語と共起する場合、(43)(44)のように反語や願望といった修辞疑問であることも多い。これは(45)のように「よ」が疑問形式に付加されて修辞疑問になることと関連があるのではないだろうか。疑問形式に「na」や「よ」を付加して確信を含んでもちかけると、それは修辞形式として反語や願望を表すようだ。「na」を付加すると、反語のみならず願望も表し得る

ところが日本語話者には理解しにくいだろう。これも期待や希望の気持ちをその形式自体に含み得る「na」の確信の柔らかさによるものである。「na」を付加した修辭疑問の場合、話し手が聞き手にもちかけているのか、話し手が自分自身で正しいあるいは望ましいと思っているだけなのか、文脈がなければはっきりしない。専ら聞き手にもちかける形式の「ね」と違って、「na」は確信表明が基本であるからだろう。

(46) 誰が笑うんだね。(反語)

(47) 「あなたは米国の農業法案をジュネーブで書くつもりかね。
(反語)」と米国議会が最近ヤイター農務長官に痛烈な皮肉を浴びせかけた。

(48) A こんなことも分らないのか?

B 分らないね。

「ね」も(46)(47)のように修辭疑問に承接するが、「ね」は確信を含まず専ら聞き手に対する懇ろな気持ちや阿りの気持ちを持ってもちかける形式なので、「ね」を付加すると皮肉としての反語になると言える。これらの反語表現の皮肉を考える上で参考になるのは(48)の例である。Aが共感できない事柄に敢えて「ね」を付加してあたかもAを考慮してAの共感を期待しているかのようなBの言葉は、実際、最大級の皮肉を込めた拒絶的確言である。常に聞き手の共感を意識した日本語の談話では、それ故にこそ、その共感を逆手にとった皮肉が成立するのだろう。

(49) sĩa cai ná. 残念だ。

(50) sĩa cai dūai ná.
残念である 共に 残念だね。(共感) / お気の毒さま。(皮肉)

(51) dii cai thĩi (chán) sòp dái. 試験に合格して嬉しい。
うれしい 関係代名詞 私 試験に合格する

(52) dii cai dūai ná thĩi khun sòp dái.
あなた

あなたが試験に合格して嬉しい。

(53) ? dii cai thĩi khun sòp dái.

「na」も「dūai (共に)」を伴った(50)のような表現ならば皮肉を表し得

るという。この「*dúai*」に関しては(51)(52)(53)の例が参考になろう。聞き手が合格したことについて話し手が喜びを伝えるとき、(53)の表現はおかしいという。そのようなときには(52)のように「*dúai ná*」を付加すれば自然な表現になる。つまり、「*dúai*」を添えることで話し手の聞き手に対する共感が含意され、話し手と聞き手の共存意識を表す「ね」の用法に近くなるからではないだろうか。だから、(50)も「*dúai*」で表される共感によって皮肉を表し得るのだろう。

一方、「*si*」は問いかけだけでなく修辞疑問にも承接しにくい。とにかく「*si*」は話し手本位の正しいあるいは望ましいという気持ちを表すだけで、聞き手にもちかけて命令を表すことはできるものの、応答を期待し問いかけて聞き手の確認を要求することもなければ、疑問形式をぶつけてその裏にある含みを察するよう聞き手に仕向けることもないようだ。幅広い対人意識を含み得る「*na*」の確信の柔らかさに比べると、「*si*」の絶対的確信は、全く融通の利かない硬さであると言ってもよいのではないだろうか。

5-3-2 独話

(54) *mua khwun níi fǎn ráai sá dúai si.*
昨夜 夢みろ 悪い

昨夜は全く嫌な夢を見てしまったもんだ。

(55) *nāa ramkhaan ciŋ ná.âi nók phíraap phúak níi.*
うんざりな 本気に 奴 ハト これら

本当に鬱陶しいな、このハトの奴ら。

(56)? 昨夜は全く嫌な夢を見てしまったもんだよ。

(57)?? 昨夜は全く嫌な夢を見てしまったもんだね。

(58)? 本当に鬱陶しいよ、このハトの奴ら。

(59)?? 本当に鬱陶しいね、このハトの奴ら。

(60) ちえ、おれ一人かよ。/おや、待てよ。

(61) そうかねえ。/そうかなあ。

「*si, na*」はそもそも正しいあるいは望ましいといった発話内容に対する話し手の確信を表すので、(54)(55)のような独話にも極自然に使用される。他方、「よ、ね」は話し手と聞き手が談話の場を共有しお互いが談話に携わって談話世界の構築に貢献しているといった共存意識を含むので、独話には

使用されにくい。(56)(57)(58)(59)も「よ、ね」が付加されているため、「si, na」が付加された(54)(55)と同じ命題内容を表してはいても、独話として不自然さがある。「よ、ね」はもちかけ先の聞き手を要求するようだ。ただし、「よ」は(60)のようになれば独話で使用されないこともない。しかし(54)(55)のような「si, na」が付加された独話と比べると、やはり誰かにもちかける気持ちが含まれているように思われる。敢えて言えば(60)は聞き手ではなく話し手自身にもちかけている表現といえるのではないだろうか。また、「ね」は「ねえ」となると、「なあ」と同様にもちかけ先が話し手自身であり得、(62)のように独話にも使用される。

5-3-3 応答

(62)A *mái hǐu rǔu.* 腹減ってない?
(否定) 空腹な へか

B *hǐu si. mái nǎa thǎam.* 腹減ったさ。聞かなくても分るだろ。
(否定) へき じずね

(63)A *mái hǐu rǔu.*

B ? *hǐu na.*

(64)A 腹減ってない?

B 腹減ったよ。でも早く仕上げなきゃ。

(65)A 腹減ってない?

B 腹減ったね。食事にしようか。

(66)A この帽子、お洒落でしょう?

B そうだね。なかなかのもんだ。

(67)A これ、貰って行ってもいいかしら?

B いいですよ。どうぞ御自由にお持ち帰りください。

タイ語では、(62)のように応答に相手に阿ることのない自分本位の確信を表す「si」を添えることはあっても、「na」を添えるのは不自然で(63)はおかしいという。日本語では(64)(65)(66)(67)のように「よ」も「ね」も応答に現れる。特に同意を表す場合、日本語では(66)のように談話における共存者としての聞き手を気遣い専ら対人意識を表す絶対的聞き手考慮の「ね」を添えて同意を表すことが多いが、タイ語では同意を表すときでも談話における共存者としての聞き手を気遣って懇ろに聞き手にもちかけ得る「na」を添えることがないのは注目に値する。

日本語でも、(67)のように許可を表す場合には、積極的に「よ」を付加し話し手の確信を添えて応答することがある。この場合は「ね」ではなく確信を含む「よ」によって、聞き手に対する話し手の懇ろな気持ちが加わるようである。この懇ろさについては以下のタイ語の応答例が参考になろう。応答の中でも特に「mái rúu (知らない)」と答える場合に限っての表現ではあるが、(68)の言い方ではぶっきらぼう過ぎると思われるとき、(69)のように「si」を付加することで懇ろな気持ちを添えられるという。そしてこの場合もまた、「na」を付加した(70)の応答はおかしいという。

(68) A rúu mái. 知ってる?
知(い)わ ~か

B mái rúu. 知らない。
(否定)

(69) A rúu mái. 知ってる?

B mái rúu si. ううん、ちょっと、知らないなあ。

(70) A rúu mái.

B ? mái rúu na.

「よ」を付加した(67)の応答と「si」を付加した(69)の応答とは、それぞれ許可を表す、知らない旨を表すといった場面は違うが、どちらも話し手の発話内容に対する正しいあるいは望ましいといった確信を聞き手にもちかけることで懇ろな気持ちを表しているという共通性がある。

ただし、「よ」を使用した表現は必然的に親密さを伴うのに対し、「si」を使用した表現は必ずしも親密さを伴うものではない。なぜなら、日本語のような懇ろさと親密表現の間の密接な関係が、タイ語には無いからである。5-1 働きかけにおけるふるまいで述べたように、日本語では話し手と聞き手の共存意識が話し手と聞き手の心的距離を縮め、両者を言わば一体化することで親密表現が成立する。そしてその共存意識は常に対人協調を要求し、懇ろさや阿りといった聞き手考慮に繋がってゆくのである。しかし、タイ語の親密表現はあくまでも話し手本位の直接的な親愛の情の表明によるものである。聞き手考慮の在り方にしても、初めに己の意向ありき、といった形である。その辺が日本語話者には理解しにくいところかもしれない。

懇ろさに関して言えば、「よ」はその形式自体に話し手と聞き手の共存意識を含んでいるので、「よ」を付加した(67)の応答表現が懇ろさを表すことは理解し易い。だが、聞き手に阿ることのない自分本位の確信を表す「si」

を付加した(69)の応答表現が懇ろさを表すことは、日本語話者にとって容易には理解し難いのではないか。なぜなら、「si」の表す自分本位の確信は、日本語の談話における懇ろな表現とは相入れないと日本語話者には思えるからである。ここで、これまでに述べてきた懇ろさと「si」の確信の性格付けについて再検討し、留保条件を加えなければならないようだ。

5-1 働きかけにおけるふるまいで、「si」は談話の場における共存者としての聞き手を考慮して懇ろな気持ちを添えることができないとした。さらに、5-3-1 修辞疑問では、「si」はとにかく話し手本位の正しいあるいは望ましいという気持ちを表すだけで、幅広い対人意識を含み得る「na」の確信の柔らかさに比べると、「si」の絶対的確信は全く融通の効かない硬さであるとした。だが、そもそも談話における話し手の聞き手に対する思いやりといった懇ろさの在り方自体に、タイ語と日本語では異同があるのではないだろうか。例えば(69)のように相手の問いに対して自分は知らないということをも懇ろに答えたい場合、タイ語の談話では、はっきりと自分が知らないという事実を認め、確信を添えることが、むしろ相手に対する思いやりであり親切であるのではないか。そうした意味では、「si」も聞き手に対する話し手の懇ろな気持ちを表し得ると言える訳である。しかし、そうした懇ろさは「よ、ね」や「na」がそれ自体に含んでいる聞き手に対する直接的な懇ろさとは別の次元のものであるとここでは考え、やはりあくまでも「si」は聞き手に阿ることのない自分本位の確信を表すとしておきたい。

日本語の談話では、問いに対して知らない旨を明らかにする場合、先ず、自分が知っているということを相手は望んでいるのだらうと察し、その相手の希望に応えられないことを懇ろに表明するために遠慮がちにものを言う。「うん」「ええと」「ちょっと」等を添えてはっきり答えず、躊躇してためらいを見せたり曖昧にぼかして表現したり、「なあ」等を添えて直接相手に向かって発言するのではなく、あたかも自分自身にもちかけて自分の中で処理する独り言のように発言したりする。それが常に対人協調を念頭に置く日本語の談話における思いやりとなっているようだ。しかし、そうした日本語の談話でも、相手に許可を与える応答の場合は、「si, na」に似て発話内容に対する正しいあるいは望ましいといった話し手の確信を含む「よ」を添えて懇ろな気持ちを表すようだ。だが、その場合の話し手の発想も、やはり対人協調に基づいていると言えるのではないだろうか。つまり、自分が許可することを相手は望んでいるのだらうと察し、その相手の希望に即して許可するという発話内容の正当性を認定しながら(確信を添えながら)積極的にもちかけることで、相手の意向に添った思いやりを表すのだと言っていいだ

ろう。タイ語話者の談話における懇ろさとは、自分の意向をはっきり伝えることであるのに対し、日本語話者の談話における懇ろさとは、相手の意向を先ず察し、それになるべく添おうとすることだと言えるかもしれない。こうした両語の応答例からも、常に対人協調を優先させる日本語話者と、むしろ発話内容をはっきりさせることを優先させるタイ語話者との談話における情意・発想の違いの一端がうかがえるように思われる。

5-3-4 感嘆

- (71) sūai sūai. 綺麗だなあ。
美しい
- (72) sūai cing cing. 綺麗だなあ。
本当に
- (73) mĕĕ, khayǎn caŋ ləəi. へえ、熱心だねえ。
まあ 勤勉は とも また
- (74) 綺麗だなあ。
- (75) へえ、熱心だねえ。

タイ語では、(71)(72)(73)のように同じ語を繰返したり「cing cing (本当に)」や「caŋ (ləəi) (とっても)」を添えたりして、程度を強調することによって感嘆を表すことが多い。勿論「si, na」を付加して話し手の確信をさらに加えることもある。日本語では(74)(75)のように「なあ」や「ねえ」を添えて感嘆を表すことが多い。つまり、タイ語では程度を強調したり確信を添えたりすることで感嘆のムードを表し、日本語では相手にしろ自分自身にしろとにかくもちかけることで感嘆のムードを表すと言える。こうした両語の感嘆表現の異同もまた、けじめある率直さに重きを置いて、発話内容の明確化を優先させるタイ語話者と、お互い共感を期待し合って、むしろ対人協調の方を優先させる日本語話者との談話における情意・発想の違いを反映しているのかもしれない。

6 まとめ

以上、本稿では、タイ語の文末小辞と日本語の終助詞から、それぞれ最も

基本的であり談話に多用されている「si, na」と「よ, ね」を取上げ、その対照を試みた。先ず共起形の「sina」と「よね」を対照して「si, na」「よ, ね」の性格付けを行い、次に様々なムードにおける「si」「na」「よ」「ね」の具体的なふるまいを検討した。働きかけのムードでは各々の性格の類似点や相違点を明らかにし、問いかけのムードでは両語話者の聞き手考慮の異同についても述べた。述べたてのムードでは修辞疑問、独話、応答、感嘆の四項目を取上げ、それぞれの性格の裏付けをすると同時に、両語話者の談話における情意・発想の異同について考察を深めた。

タイ語と日本語を対照する視点に立った説明では、不本意ながら「si」に「自分本位」という言葉を用い、「ね」に「阿り」という言葉を用いざるを得なかった。どちらの語感もあまり良いものではないが、両語の談話における発想の異同を際立たせようとする、どうしてもそうした両極端の言葉が必要だったのである。聞き手との共存意識から来るところの懇ろさや阿りの気持ちによって、相手の意向になるべく添おうとする日本語話者の聞き手考慮の在り方は、先ず自分の情意や意向をはっきり伝えようとし、そこから希望や期待といった聞き手考慮に繋がってゆくタイ語話者の聞き手考慮の在り方とは異質なものである。そうした聞き手考慮の異同が、両語話者の談話における聞き手への思いやりや親密表現の発想の異同にまでも繋がっていると考えていだろう。本稿で考察した「si, na」「よ, ね」それぞれのふるまいは、けじめある率直さに重きを置いて発話内容の明確化を優先させるタイ語話者と、お互い共感を期待し合っつてむしろ対人協調の方を優先させる日本語話者との談話における情意・発想の違いを端的に示すものであろう。

最後に、「si, na」と「よ, ね」の機能的意味をまとめる。

○「si, na」

話し手の発話内容に対する確信を表す。正しいあるいは望ましいと思っている。親密表現にもなり得る副次的親密性を持つ。

・「si」

話し手が聞き手に阿ることなく、自分本位で正しいあるいは望ましいと思っている。聞き手にもちかけて聞き手を行動に駆立てることもできる。

・「na」

談話における共存者としての聞き手を気遣い得る柔らかい確信を表す。懇ろに聞き手にもちかけて、聞き手に期待したり希望したりすることもできる。

○「よ、ね」

話し手と聞き手の共存意識を表す。談話の場を共有し、お互いが談話に携わって談話世界の構築に貢献しているという含意を持つ。第一義的に親密性を持ち、談話における積極的な親密表現である。

・「よ」

確信をもって聞き手にもちかける。しかし、「si」のような絶対的確信ではなく、聞き手の判定を察して仮定する擬似的確信のときもある。

・「ね」

懇ろな気持ちや阿りの気持ちをもって聞き手にもちかける。談話における共存者としての聞き手を気遣い、聞き手を判定主と見立てて共感を期待することもできる。専ら対人意識を伴い、絶対的に聞き手を考慮する。

7 おわりに

本稿では取扱わなかったタイ語のその他の文末小辞についても、今後、考察を進めてゆきたい。タイ語のモダリティ体系を把握する一助になればと思う。タイ語の文末小辞の検討は、日本語の終助詞研究にも新たな視点を生むはずであり、さらに大きく普遍的なモダリティ研究にも資するところがあるだろう。そのほんの端緒に過ぎない本稿では、まだまだ拙い点が多く恥入るばかりであるが、遥かな前途の第一歩として本稿を位置付けようと思う。そして、文末小辞や終助詞だけでなく、その他の形式も視野に入れながら両語話者の談話における情意・発想の異同を探ってゆきたい。タイ人のための日本語教育に役立つことができれば幸いである。

なお、タイ語の例文を検討するにあたっては、タイ語の母語話者として、共にバンコク出身であるカモンオーン・コモニックとアモンパーン・ブンスーの両氏に協力して頂いた。ここに改めて感謝の意を表したい。

<参考文献>

- 松下大三郎1930『標準日本口語法 増補校訂版』勉誠社
佐治圭三1957「終助詞の機能」『国語国文26』
宮地裕1958「ことばの使い方 助詞・助動詞」『日本文法講座5』明治書院
渡辺実1968「終助詞の文法論的位置 叙述と陳述再説」『国語学72』
渡辺実1971『国語構文論』高書房
上野田鶴子1972「終助詞とその周辺」『日本語教育学17』
田中章夫1973「終助詞と間投助詞」『品詞別日本文法講座9』明治書院
富田竹二郎1978「標準タイ語教本Ⅰ」財団法人語学教育振興会
柳父章1983「文末の表現」『日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房
水谷信子1985『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
蓮沼昭子1988.6「続・日本語ワンポイントレッスン第二回」『月刊言語』
神尾昭雄1989「情報のなわばり理論と日本語の特徴」
『日本文法小辞典』大修館書店
森山卓郎1989a 「コミュニケーションにおける聞き手情報 — 聞き手情報
配慮非配慮の理論 — 」『日本語のモダリティ』くろしお出版
森山卓郎1989b 「文の意味とイントネーション」
『講座日本語と日本語教育1』明治書院
梅原恭則1989「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育4』明治書院
柴谷方良1989「日本語の語用論」『講座日本語と日本語教育4』明治書院
仁田義雄1989「文の構造」『講座日本語と日本語教育4』明治書院
近藤泰弘1989「ムード」『講座日本語と日本語教育4』明治書院
Richard B. Noss1964. Thai Reference Grammar.
Washington D. C. : Foreign Service Institute
Mary R. Haas1964. Thai-English Student's Dictionary.
Stanford California: Stanford University Press.
J. Marvin Brown1967. A. U. A Language Center Thai Course Book3. Bangkok:
The American University Alumni Association Language Center
Udom Warotamasikkhadit 1975. Dependency of Underlying Structure and
Final Particles in Thai; Studies in Thai Linguistics in Honor of
William J. Gedney. Bangkok: Central Institute of English Language
Kamchai Thonglo1987. Lak Phasa Thai. Bangkok: Bamrungsarn Press
Phraya Upakitsinlapasarn1989. Lak Phasa Thai.
Bangkok: Thaiwattanaphanit Press

<用例の出典>

Z-sæ̀t- (Z-ツェットー).

Nawaphol Thongkham訳1986. Bangkok: ? Press

[『Z-ツェットー』青池保子1981白水社]

Lamu, sao noi mahatsacan(不思議な少女ラム).

Waam Jaokaõ訳1989. Bangkok: Mukjean Press

[『うる星やつら』高橋留美子1982小学館]

MAIZON IKKOKU, ban phak onlaweang! (喧しいアパート! めぞん一刻).

LINE ART& NETWORK訳1989. Bangkok: Wibulkit Press

[『めぞん一刻』高橋留美子1982小学館]